
転生したら最強で女の子で性別不問ハーレムが！！

佐倉風弦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生したら最強で女の子で性別不問ハーレムが！！

【Nコード】

N7098X

【作者名】

佐倉風弦

【あらすじ】

俺は、学校一の美少女、桜下リナに告白したが振られてしまう。リナは何と同姓愛者だった！ 悲しみにくれないながら帰る途中、突然目の前が真っ白になり 目を覚ますと俺は異世界に転生していた！？ 俺を転生させたラルド王国の国王は戦争のためどうしても異世界の者の力が必要らしく、俺の世界で悪く言えば大量虐殺、そしてこの世界へ大勢を転生させた！

何か最強みたいで、嬉しいよ？ 嬉しいけど……何で俺、女の子なんだろうね？

もはや元の世界に戻る術もなく、俺は戦いに身を投じる。そして、
出会ったのは転生した だった。

プロローグ

「すみません。私……男の方は苦手なんです。その……女の子が好きで……」

学校一の美少女と言われる桜下リナに告白した俺は見事に振られてしまった。

目の前に見えるのは申し訳なさそうに頭を下げる完全なる美少女。彼女の桜下という苗字にちなんで告白する場を桜の木の下を選んだんだけど、今となってはムードも何も無い。

それにしても 男は苦手？ 女ならいいのか？

できれば考えたくないけど、桜下リナは同性愛者ということ……その事實は俺にとってあまりにもショックだった。

悲しみにくれながら帰路を歩くこととなった。

赤みを帯びた空には沈みかける夕陽が見える。なんて言うか、あの美しさが傷付いた身に染みる……。ああ、胸が痛い……。

桜下リナが女の子を好きなんて……。

……もし、生まれ変わって俺が女になったら、俺のこゝと好きになってくれるんだろうか……。？ いや、性別で好きか嫌いか決まる愛なんて……。

そんなことを考えながらボンヤリと歩いていると、目の前が真っ白になった。

「え？」

「ごめんなさい。本当にごめんなさい……」。

声が聞こえる。申し訳なさそうな、悲しそうな声……。

何が起こっているのか分からなかった。

何で、目の前が真っ白に？ この声は何で謝ってるんだ？

ごめんなさい。力が……人が……必要なんです。この世界での、あなたの人生を奪ってしまうことをどうか……どうかお許してください。

ゆっくりと視界が暗くなっていき、ついには何も見えなくなった。

第一論

目を覚ますと真つ白な天井が見えた。白色なせいか清潔感を感じる。

背中にはふわふわした感触……ベッドの上か？ うん、多分ベッドの上だ。

とりあえず起き上がり、部屋のなかを見回した。

豪華なテーブルやソファが並べられたまるで貴族の屋敷の一室みたいだ。

何だよコレ？ 俺の知り合いに金持ちはいなかったはずだけど……。

「ん……？」

何か身体に違和感を覚えた。

今まではなかった……ちょっと胸のあたりがポリウームを増したような。

恐る恐る胸に手を当ててみる。かすかな……ホントにかすかだけどぶくらみが……ある。

……俺、男だったはず……。あれ？ 胸にぶくらみがあるだけじゃなくてアレがない……。いや、具体的に何とは言わないけどさ。

これは……？

一体何が起こってるのか理解できず焦るばかりだった。

そんななか、部屋の扉が開いて一人の少女が姿を現した。

ピンク色の長い髪に尖った耳……。あと、何ていうか説明しにくいけど……えーと、あれだ。何かスクール水着とメイド服を統合したような衣装。

尖った耳なんかを見る限り、人間じゃない……。ここは夢のなかか？

少女はスタスタとこっちに近づいて来て、ベッドの隣で立ち止まるとにこりと微笑んだ。

「お目覚めになられましたか？」

「……えつとここ、どこなんだ？」

「電子と魔法を有する世界……テファルワールド」

「テファ……？ ファンタジックな名前だなそれ」

「ええ。だってこの世界は、あなたのいた世界とは違うんですから」
「へ？」

少女の言葉が理解できずに固まった。違う世界？ 何が何だか理解できない。

俺の様子を気にする風もなく少女は続ける。

「あなたは、一度死にました。そして、この世界に転生しました」
「はっ!？」

少女は黙ってポケットから手鏡を取り出し、差し出してきた。
それを受け取り、恐る恐る覗き込む……。

「あ、れ……？」

そこに映っていたのは、短い黒髪の少女……。まさか、これが俺か？

いや、原型は留めてる。だからこそ、すぐに自分の姿であると分かった。本当に、転生したのか？

これで桜下リナとキャツキャウフフできるぜ！ とはいかない。
それが本当に起こっているなら俺と彼女がいるのは別世界。

「私は、エルナと申します。あなたの名前は……セオです。国王様

から送られた名前です」

「セオ……」

「あなたには、このマールデアランドの騎士として戦ってもらいたいのです」

「は……？」

つまり、俺が転生させられたのは戦争にでも行かされるためなのか？

そんなの勝手すぎるじゃないか。

「そんなのこの世界の奴に頼めばいいだろ！？ 早く元の世界に帰せよ！」

「それは無理です。既にあなたは、あちらでは死んだことになっていますから。あと……どうしてもあちらの世界の人間が必要だったんです。この世界はあちらの世界より脆いですから……。あちらの世界にいた人間は強い力を発することができんです。重力だって違いますし……」

「なっ……そ、そんなの……いきなり言われたって……」
「すみません……」

エルナは申し訳なさそうに頭を下げた。

「少し休んでいてください。私は廊下にいますから、落ち着いたら呼んでください」

言い残し、エルナは部屋を出て行く。

ベッドに寝転び、天井を見上げる。

もう帰れないのか……。

じゃあ、桜下リナにも会えない。

……こんなことなら、もっと積極的にアピールしてたら良かった

なあ……。

もしかしたら、桜下リナも同姓愛者じゃなくなって……俺のこと好きになってくれたかもしれないし……。

このまま何もしないでいても、ただ時間が過ぎていくんだろうな。こっちに桜下リナに似た女の子もいるかもしれない。あ、俺女なのか……。

……くそ、帰れないならこのままいたって仕方ない。

あれだ、戦って有名になってハーレムでも建設しよう。それがいい。

あ、いや俺女になったし……男を侍らせるのは今まで男だっただけに抵抗が……。女の子を集めて百合百合展開……でもそれは変な方向に踏み外しそうだしな。とりあえず、有名になって金持ちになつて豪邸でも建てよう。

思い立ったら即行動。俺はベッドから出ると部屋のドアを開けた。廊下に立っているエルナに声をかける。

「エルナ……だっけ？」

エルナ……多分エルナだったよな？ あ、エルシーの気もしてきた。

エルナはこちらに振り向くとにこりと微笑んだ。

「何でしょう？ セオ様」

「んーと……一応、戦うよ。まあ、他にできることなさそうだしさ」「そうですか。では国王様に挨拶を……あ、その前に」

エルナが一旦部屋に入ると手招きするから俺も部屋に入った。

豪華な赤色の引き出しからエルナが取り出したのは、青色の変わった服と下着だった。

こちらに差し出してくる。

「これは……」

「騎士用の制服ですよ。軽装なので動きやすいと思います。鎧は重
いでしょっ？」

「確かに……重そうだな」

服を受け取ると、エルナは「廊下で待ってます」と言い残して部
屋を出て行った。

俺は服に手をかけ、ぴたりと手を止める。

下着……。

「これ、履くのか？ 何て言うか、すごく恥ずかしいって言うか…
…」

今まで男だったから、すごい抵抗があるんだけど……。
ど、どうすればいいんだよっ!？

第二論

恥ずかしさを堪えて着替えた俺は、廊下に出る。

エルナがにこりと微笑み、

「では、参りましょうか」

「あ、ああ……」

うーん……何か妙だなあ……。

女になつたからって、女みたいな喋り方するのは何か嫌だし……。てか、そんなことしたら俺、絶対キモイに決まってる。まあ、喋り方は人それぞれだしこのままでも大丈夫か。

真つ赤な絨毯がしかれたいかにも豪華な雰囲気をかもし出す長い廊下を歩き続けた。

この廊下長すぎだろ……。

広すぎるってのも疲れそうだな。俺が豪邸建てる時はこの辺も気をつけてあんまりでかすぎないようにしよう。

他の部屋も十分に豪華なんだけど、王室はもう桁違いだった。

赤い絨毯はもちろん、女神らしきものの石像が四体もある上に天井にはキラキラ輝くシャンデリアがいくつもぶら下がり、中央の玉座は宝石と金で装飾が施された真つ赤な椅子だった。

そして、国王というのが　すごい美人だった。

美人と言えば、大方分かるだろうが女だった。国王と言うより女王と言つべきだとも思つけど皆国王って呼んでるから国王ということにしとこう。

輝く黄金色で流れるような長い髪、アクアマリンの如く綺麗な瞳に何気に露出度が高めのいくつもの豪華な布を使ったと思われる深

海をイメージさせる蒼いドレス。

もはや……コイツ美人じゃないし、とひがむ隙も与えない 絶
世の美女がそこにいた。

まあ……桜下リナよりは下だけだな。いや、ほんとに。

国王は椅子から立ち上がるとにこりと微笑んだ。まるで女神のよう
うな……。

「はじめまして、セオ。私が国王、セラグリムよ。よろしくね」
「よ……よろしく……」

国王だからもっと丁寧な言葉を使ってくると覚悟していたが、そ
うでもなかったので思わずうろたえてしまった。

「エルナに聞いたと思うけど……このマールデアランドは、隣のデ
ファレフ王国と戦争をしているの。けど、デファレフ王国の力は強
大で……こちらは、小さな国だから人口も少なく兵もあまりいない
だから……異世界からあなたを……いえ、あなただけじゃないわ。
大勢の人間をこちらに移したの。あちらの世界はこちらより頑丈で
働いてる力も強い」

「え？」

正直、話が理解できない。あつちの世界が頑丈？

セラグリムは、こっちが混乱しているのに気づいたようで。

「そうね。この世界に来てから身体が軽くなった気はしないかしら
？」

「そう言われてみれば……」

「試しに……エルナ、あれを持って来て」

「は、はい……」

慌ててエルナが運んで来たのは、木の板らしきものだ。
これが何だというんだらう？

「これをパンチで割って……いえ、チョップで十分ね」
「チョップで……」

普通、国王がパンチとかチョップとか言うか？

そこはあまり気にしない方がいいのかな。

とりあえず、言われた通りエルナが持つ木の板にチョップをかますことにした。

「ていつ」

木が割れる独特な音が響き、真っ二つに。

「え……?」

いや、普通は木の板でもチョップで割ったりできないはずだろ？

「ちなみにそれは、特別固い木よ。分かったでしょう？ この世界は、あちらより重力が軽い。この世界より重い場所にいたあなたは、こちらでは強い力を発揮できるの」
「……………」

つまり、あつちの人間がこっちに来ると強いってことか？ そう
いうことだよな。

「いきなり戦争に行けとは言わないわ。あと、手をかざしてみて」
「手を？」

言われた通りに手をかざしてみた。

すると、丸い緑色のウィンドウのようなものが現れる。

そのウィンドウには、俺の名前　セオという文字が浮かび上がっていて他にも項目があった。

《魔法》 《持ち物》 。

「魔法の項目は、使える魔法のリスト。持ち物は今持つてる武器とか道具のリスト。それぞれの項目をタッチして目当てのものを選んでタッチしたら魔法を使えたり、物を出現させることができるから」「ん？　魔法つて手から出したりするんじゃないのかよ？」

「マールデアランドは電子の国よ？　魔法も武器も電子で形成されてるの。このおかげで、本来魔法を使えない……魔力の持たない者にも魔法を使うことが可能。他の国では、異世界の人間に魔法の力を与えることはできないわ。人間には魔力がないんですもの」「そ、そうなのか……？」

異世界なのに電子かあ……。

何か妙な気もするけど……。

「それにしても……セオって可愛いわね」

「はっ……！？」

予想外の言葉に思わず固まった。

えーと……この人国王だよな？　国王がこんな簡単に可愛いとか言うのか？

「ねえ、エルナ」

「はい。何でしょう？」

「食べていい？　この子やっちゃっていい？」

「い……いや、俺は女……だし……」

もしかしてセラグリムは……百合百合だったりするの？
見た感じ、旦那さんがいる感じはしないし……。
そういう……。

「ダメです。そんなことして、セオさんが戦ってくれなくなったら
どうするんですか!？」

ぶくつとほっぺを膨らませて怒ってるらしいエルナ。
戦ってくれるなら、いいってことなのか？
いやいや……。

「う……それもそうね。勿体ないけど……百合ハーレムの子達で我
慢するわ」

「百合ハーレム……?」

百合ハーレムって、そのままの意味なんだろうな……。

「そうそう。私は、普通に男を集めたハーレムと女の子を集めた百
合ハーレムを持つてるのよ。性別なんか関係なくどっちでもいける
からね」

一応、セラグリムがいろいろやばい奴だってことは分かった。

「私の娘を紹介したいところだけど……」

「セフィーナ殿下は町に出かけております」

「そう……」

娘いるのか!?

この人の娘かぁ……。

なら、やっぱり美人なんだろうけど……中身は……考えたくない。
何だかなあ……。

「あ、そうだ。エルナ」

セラグリムは何かを閃いたようにパンと両手を合わせてエルナを見る。

エルナはさっと姿勢を正す。

「何でしょう?」

「セオに町を案内してあげなさい。来たばかりでアレだから息抜きも必要でしょう? あと、その後他にもセオと同じ世界から来た人間を紹介してあげて?」

「は、はい!」

そう言えば、他にも向こうから来た人間がいるんだっけ?

それなら、会ってみたら気が楽になるかな?

知り合いとかは……いるんだろうか……。

俺は少しだけ、まだ見ぬ仲間に思いを馳せた。

第三論

エルナに連れられ、町に出た俺は驚きを隠せなかった。もう今まで見たことのない、ファンタジックな町並みが広がっていた。

レンガ造りの家が立ち並び、様々な武器や道具を売っている店……きれいな外装の教会だとかあつちの世界では目にしたことのないもので溢れていた。

戦争中とは思えないほどの賑わいを見せている。この町に住む者達もやっぱり人間ではなく耳の尖ったエルフとか背中に白い羽を生やした天人や普通の人間と変わらない容姿を持ちながら獣の耳と尻尾を生やした獣人なんか溢れかえっていた。

一通り町のなかを回った後、エルナが笑顔で声をかけてくる。

「町はずれの方へも行きましようか？」

「何かあるのか……？」

何もなければ、わざわざ行く必要はないと思っし……。にこりと笑顔で。

「はい。海があるんですよ？　きれいなんですよー」

「海か……」

海なら向こうの世界にもあったけど見るのもいいかな。

町はずれには、広い砂浜があった。

さらさらした砂が明るい太陽の光を浴びて輝く向こうに広大な蒼い海が広がっていた。

素直にきれいだと思った。

海は、向こうとそんなに変わらないんだなあ。あ、いや、こつちなら海のなかに魔物とか住んでるかもしれないけど……見た目はって言うの？ 何かおかしいな……。

そんなことを思っていると、悲鳴が聞こえた。

「え……？」

何だろう……。行った方がいいのかな？

もしかして、誰かが魔物か何かに襲われてるのかもしれない。

俺はすぐにエルナに確認する。

「どこから聞こえたっけ？」

「あっちです！」

エルナが指差したのは、すぐそこに見える森の入り口だった。

確かに森のなかなら、魔物とかいそうだな。

急いで森のなかへと向かう。

木々がうっそうと生い茂り、日光を遮る森のなかは薄暗く不気味な雰囲気漂っていた。

邪魔な草を掻き分けつつ、奥へと進んで行くとき神秘的な泉がある空間に出た。

その泉の前で一人の少女が魔物に囲まれていた。

牛の出来損ないみたいな形の魔物はフンフンと鼻息を吐きながら少女をじりじりと追い詰めていた。

彼女の後ろは泉で、これ以上下がれば落ちてしまふ。周囲を魔物が囲んでいるせいで逃げ場はなさそうだ。

「えっと、武器出すのってどうやるんだっけ!？」
「ウィンドウを呼び出して持ち物をタッチしてください!」

エルナに言われた通り、ウィンドウを呼び出し《持ち物》をタッチ。持っている物のリストが表示される。
再びエルナに向き直る。

「次は!？」

「その炎豪刀えんごうとうをタッチしてください!」
「了解!」

炎豪刀をタッチすると、目の前に赤い光が出現し、炎のように紅い刀身の刀に姿を変えた。

宙に浮いたままのそれを掴み、魔物に斬りかかった。

牛のような身体が真っ二つに切断され、断末魔が上がる前に光の粒子となって跡形が残ることなく消え去った。残りの魔物も同じ手順で葬った。

どうやら本当にこの世界では強い力を発揮できるらしく、難なく魔物を倒すことができた。

「だいじよ　おっと!？」

声をかけようとした途端、少女はこちらに飛びつくように抱きついてきた。

……恐かったのか。

そうだよなあ……。

正直言うと俺も思わず泣きそうだったし……。

その少女は、向日葵のような黄金色の髪を背中あたりまで伸ばし、アクアマリンのような瞳に黒色の魔道師の服っぽい上着とミニスカ。そして……尖った耳。

何て言うか、すごい可愛い子だ。

「ありがとうございます！ あの……お名前をお聞きしていいですか？」

「お、俺はセオ」

「セオ様ですね。あなたのような勇敢な方に助けてもらって……私は幸せです」

「そろそろ離れ……」

「セオ様。どうか私をあなたの元に置いてください」

「……俺は、女なんだけど……」

何かまずい方向にいつてる気がする……。

「性別なんて関係ありません。愛があれば」

「愛はないよ」

「王女殿下、その辺りで……」

「え？」

王女殿下？

今、エルナは確かにそう言ったはず。

じゃあ、この子があのセラグリムの娘なのか？ 確かに外見も似てるし中身も 何かしら受け継いでそうだ。

少女は不満そうな表情でようやく離れてくれる。

「あら？ エルナもいたの？」

「お気づきにならなかったんですか？」

「そりゃあ……私の目には愛しいセオ様しか映っていませんから」

エルナに対して少女はポツと顔を赤くして答える。

……俺が男のままだったら、この状況には多少は喜んでたかもし

れない。

多少は……。

「ん？ エルナもいるってことはセラ様は異世界から来た例の？」

「はい」

「わざわざ異世界からお越しいただき、その上この国のために戦ってくださるなんてありがとうございます！ ああ、やっぱりセラ様は素敵な方です」

「……………」

「と、とりあえず戻りましょうか」

とりあえず城に戻ると、再び王室にいた。

「この子は、セフィーナ。もう知ってると思うけど私の娘よ」

「……………うん」

改めて紹介してもらった。

この親子が変人なのは間違いなさそうだな。

「改めてよろしくお願ひします、セ才様」

ぺこりと頭を下げるセフィーナ。

何かちよつと今日は……疲れた。

「休憩したいから部屋に戻っていい？」

「いいわよ。お休みなさい」

王室を出ると無駄に長い廊下を歩いた。いや、ホントに長すぎだろ。

人が疲れてるってのに、この長さはケンカ売ってるのか？

短くなーれ。うん、無理なのは分かってるよ？ 分かってるけど

……思っちゃうんだ。

それにしても……まだ慣れないなあ。

いきなり女になるなんて……。

これってさ、恋愛とかする場合に立場逆転になっちゃうだろ……。

今まで付き合ったこととかはないから、まだマシなんだろうけど

……。

ため息を吐いて、トボトボ歩く。

ふと前方に人影が見えた。

誰がいるな？ これって、挨拶とかしなきゃいけないのか？

相手の姿がはつきりと見える所まで来た時、思わず目を奪われた。

いや、すごく美人だったとか美形だったとかそういうわけじゃな

く……。

目の前の人物は亜麻色の髪に、騎士用の服の青年……。

姿も性別も変わっていたけど、原型は留めていて……。

こちらに気づいたその青年は、笑顔を浮かべる。

「はじめまして」

「……………」

「？」

その姿を見て、脳裏に浮かんだ名は

桜下リナ。

第四論

目の前の青年は、どう見ても転生した桜下リナにしか見えなかった。

もう、まさに桜下リナが男になったらこんな感じだろうなってやつ……。

セラグリムもエルナも言ってたけど、この世界に転生したのは俺だけじゃない。

それを考えると、桜下リナもこの世界に転生してたっておかしくない。

でも コイツは今、はじめましてって言った。

俺と桜下リナは何も無関係ってわけじゃない。確かに桜下リナは多くの男に告白されてたからその一人にすぎない俺のことが特別心に残ってるとは思えないけど 俺が告白したのは、転生する直前だ。

全く覚えてないなんてことは、ないと思う。

もしかして、姿が変わってるから分からないとか？

一応、原型は留めてるからそんなに分からないってことはないけど……やっぱり性別も変わってる分他の人から見れば分かりにくいのかな？

とか思いながら、振られたこともあって自分の正体を明かすのも気まずいと思った。

「あ、僕はラゼルと言います」

長い沈黙に耐えかねたのか、自己紹介をしてきた。

俺もいつまでも沈黙しているのは悪いので、こちらからも自己紹介をする。

「俺はセオ」

「俺……？」

不思議そうにこつちを見てくる。

まあ、そつだよな。

流石に俺なんて言う女はなかなかいないだろうし……。前は男だったから、とか言えるはずもないけど。

「あ、セオさん！」

「ん？」

振り向くと、廊下を駆けてくるエルナの姿があった。

うん、そんなに走ったら胸が揺れるからね？ 痛いよ？ 多分痛

いよな？

まあ……俺は揺れる心配ないから別に関係ないんだけど……。

……どうせ女になるなら、貧乳じゃなくて巨乳でも良かったんじゃないか？

胸を押さえながらエルナが立ち止まる。

畜生……胸のポリウムが増えすぎて太っても知らないぞ……。

「その方もセオ様と同じ世界からお越しになられたんですよ」

「やっぱりか……」

「ちなみに……大抵の人には、あちらの世界の記憶はないんですよ」

「え？」

「ほら、通常なら前世の記憶というのはないものです。セオ様みたいなケースは稀なんです」

なるほど……。記憶がないのか。

それなら、はじめましてだよな……。

もはや目の前の桜下リナ いや、ラゼルは爽やかな笑顔を浮か

べたままだ。

……完全にモテるだろうな。結局、生まれ変わっても性別が変わっても本質は変わらない。

つまり、俺が言いたいのは……モテる奴は性別が変わってもモテるんだろうなってこと。

うん、俺は……俺は……いいんだ。女になっても可愛くないし……。

それにしても……桜下リナは同姓愛者だったけど、もしかして男に生まれたかったのかなとか考えてみたり。

「あ、ラゼルさん。こちらがセオさんです」

「そうなんですか。話は聞いてます。よろしくお願いします」

どつという話を聞いてたんだ？

まあ、そんなに気にする必要はないか。

「よろしく」

それにしても……記憶がないのか。

いや、記憶があってもいいことはないと思うし、これはこれでいいんだけどさ。

それと 俺のコイツに対する気持ちは……無関心でいいのかな？
いいよな？ うん、俺が好きだったのは桜下リナであって……。

いや、その美少女じゃないからダメとかそう言うわけじゃないんだからな？ 桜下リナの中身も当然好きだったわけで……優しくってちよつと天然なところとか……。

「あの、具合でも悪いんですか？」

ラゼルが心配そうな表情で尋ねてくる。

しまった……。
また沈黙してた。

「悪くないよ。ちょっと考えこととしてただけだから」

「そうなんですか？」

「そ、そうだよ」

そうか、普通は記憶なんか残ってないのか。

何だか寂しいような……。

しかし男になっちゃったのかあ……。

うっ……残念だなあ。

確実に俺のなかでは世界最高の美少女だったって言うのに……。

いや、男になっても一応美形だけどさ？ いや、女のままでも困ってたけど。

俺も女だしさ。百合百合とはいかないけど……。

「あ、そうだ。折角同じ世界から来たんですから、お話してみるといいですよ？」

何でそうなるんだ？

目の前にいる桜下リナ……あ、間違えた。ラゼルを見据える。

「じゃあ……ここで立ち話も何ですから部屋で話しますか？」

相変わらず笑顔。

うん、普通の女の子ならこれだけでも落ちるかもしれない。

生憎俺は普通の女の子じゃないからな。

こんなもので落ちない。うん、相手が前世の想い人だろうと簡単には落ちない。

落ちないからな。

無駄に広い子供が遊びまわれそうなほどスペースに空きがある部屋に入ると思わず立ち止まった。

話って何を話せばいいんだ？

記憶があつたら、向こうの世界の思い出とか話せたかもしれないけど相手は記憶がない。

この状況で向こうの世界の話を持ち出すのはNGだろう。

それ何の話？ ってなりかねない。

じゃあ、魔法の話でも ってまだこの世界に来たばかりでほとんど知らなかった。

何を話そうか考えながら部屋のなかをうろついてたら向こうから声をかけてきた。

「一つ……言いたいことがあるんですが……」

「言いたいこと？」

話じゃなくて言いたいこと？

もし、なぜあなたは貧乳なんですとか聞いてきたらブチのめすぞ。

元桜下リナだからフルポッコは勘弁してやるけど。

ラゼルは、どういうわけか俺の手を握ると真剣な表情で見つめてくる。

「好きです」

「黙れよ!？」

ホントに何なんだろう？

この世界に来て、女になって……王女様にモテてコイツにもモテ

て……。

俺可愛くないよ？

すごい美少女になってるなら、この状況も領けるけどさ……。
そうでもないし……。泣いてないよ？

「では、とりあえず……」

話の切り替えが早くて助かるよ。

「僕があなたをお守りします。これでよろしいですか？」

「黙れって言ったのが聞こえなかったのかよ？」

「すみません。耳が遠くて」

「それに……多分俺、強いしさ……」

自信過剰とか調子に乗ってるとかじゃなく本気で。

この世界じゃそれなりに強いみたいだ。

なら、わざわざ守ってもらわなくてもいいだろうし。

「では、悪漢から」

「ホントにもう黙れよ」

俺に興味を示す悪漢がいたらある意味奇跡だろ。

何かもう考えるだけで疲れる。

立っているのも疲れるし、ベッドに腰掛ける。

ふわふわのベッドは、気持ち良くて疲れを取り去ってくれる気がする。

もう寝たいな。一生この心地いい布団から出たくない。

無理なんだけども。

ベッドでボーっとしているとラゼルが戸惑いがちに声をかけてくる。

「あの……お誘いは嬉しいんですが、僕はまだ未経験で……そ、それにまだ早いかもしれませんし……あ、でもお望みなら何とか……」
「何勘違いしてんだよ!? ベッドに座っただけだからな!？」

いや、もう本当にコイツ桜下リナなのか？

まあ、俺は桜下リナの全てを知っていたわけではないけど……。勘違いは激しいみたいだけど、突然襲いかかってくる猛獣みたいな性格ではなさそうだし、それなりにいい奴なのかな？

一応は前世の性格を受け継いで優しいところがあって紳士的だと信じよう。

第五論

太陽の眩しい光で目を覚ました。

朝の日差しは思ったよりも強烈でじわりと目の端に涙が滲む。

ベッドから出ると窓から外を覗いてみる。

青と白のグラデーションが広がっている。まさに夜明けの色彩。

きれいだなと思いつつ眺めていたら背後から衝撃を感じた。いや、殴られたとかそういうものじゃなく抱きついてきた衝撃だ。

何だろうな……。振り向きたくないよ……。

何で抱きついてくるんだよ。抱きつく必要性はないと思うんだ。

それともこの世界じゃ抱きつかれるのは日常の一部なのか？ いや、そんなはずはない。

今、自分に抱きついてる奴以外は抱きついて来なかったし。

やがて、明るく可愛らしい声が響く。

「おはようございます、セオ様！ ああ、今日も凜々しいです。あなたのぬくもりを感じられて私はとても幸せです」

コイツは自分の行動と言動を恥ずかしいと思わないのかよ？

どういう教育受けてきたのかちよっと知りたくなった。

それを素直に聞けば、コイツがさらに興奮するのは間違いないからやめておく。

今なおぎゅっと力を込めて抱きついてきているセフィーナを引き離すと振り向いて声をかける。

「いきなり抱きつくなよ」

王女なら貴族の男とか選び放題だろうに……。

何を好き好んでこっちに来るんだよ。

まさか、女にしか興味ないとか？ いや、あの時俺が助けたからか？

ホントに王女なのか疑うほどだ。

でも、あのセラグリムが国王つてぐらいだから、案外何も不自然じゃないのかもしれない。

父親の顔も見てみたいよ。

いや、ご挨拶に伺うわけではなく……。

「セオ様、行きましょう！」

言いながらセフィーナは俺の手を引き、歩き出す。

どこに行くんだよ？

とりあえず、手を振り払う。

「手なんか引かれなくても歩けるからな」

「セオ様……」

肩を落としてシユンとした表情になる。

うん、普通の男なら落ちるだろうな。いきなり襲いかかる奴もいるかもしれない。

けど俺は、女だ。一応……。

「行きましょう」

にこりと笑うセフィーナの笑顔は愛らしい。

そう、外見は可愛いんだよ。

でもさ、俺も女だから。

セフィーナに続き、長い廊下を歩く。

靴の音が無駄に長い廊下に響き渡る……。

「あ」

ぱったりとラゼルを出くわした。
ラゼルは朗らかな笑みを浮かべる。

「おはようございます、セオ」

「ああ、おはよう……」

「……………」

セフィーナが険しい表情で沈黙していた。

初めて見る表情だ。いつも嬉しそうな顔しか見たことないんだけど、何かあったのか？

「ああ、セフィーナ王女もいたんですね？」

何か含みがありそうなラゼルの言葉。

……いたんですねってよく考えるとちよつと失礼じゃないか？

その言葉を聞いたセフィーナが顔を引きつらせる。拳を固く握りしめて震わせてる。

怒ってるのか？ 確かにいたんですねとか言われたら腹立つかもだけど……。

「いたんですねって何よ？ これだから男は……………」

「何か言いたいことでもあるんですか？」

「言いたいこと？ あるわよ。セオ様に慣れ慣れしくするんじゃないわよ」

えーと……セフィーナさん？ 敬語じゃなくなってますよ？

素が出ちゃったってところか？

「なぜですか？ そんなルールはないじゃないですか」
「セオ様は私のことを愛してるんだから！」

いや、愛してないよ？

「それはないでしょう？ なぜなら、昨日……僕はセオさんからお誘いを受けましたし」

何も誘ってねえよ。

「セオ様は私と結婚するって言ったんだから！」

だから言っていないって。

俺の言葉を都合良く脳内変換しすぎだろ。
思い込みも大概にしろ。

「いいえ、セオさんは私の妻になると約束してくれました。女性同士では子作りもできないでしょう？」

約束なんか存在しない。

てか、軽々しく子作りとかいう単語を持ち出すな。

元桜下リナがそんな発言するのはやめてくれ。前世の桜下リナを汚すんじゃない。

ホントにもうコイツら黙れよ。

この状況、私のために争わないで！ とか言えるんだらうけど言っただまるか。

この組み合わせを見るよ。

勝手に人の言ったこと都合良く変換して自信過剰に愛を語ってるような奴らだぞ？

あと、片方が自分と同じ性別って何だよ。もうやだよ。

今も言い合いが続いてる……。
流石に耐え切れなかった。

「いい加減にしろおっ！」

「うう……すみませんでしたセオ様……だから……許してください」
「僕も申し訳ありませんでした。だから許してください……」

シヨンボリ肩を落としてこっちの様子を伺ってくる二人。

「もういいよ……」

「ホントですか！　ありがとうございます！」

「良かったです」

反省してるのか？

いや、この様子を見る限り反省してなさそうだけど……。

「フフ……早速みんな仲が良さそうで私も嬉しいわ」

セラグリムは、玉座に腰掛け、それはもう美しい笑みを浮かべていた。

王室って、国王が座る椅子しかないんだな。

客の分も用意しとけよな。

何様だよ……。あ、王様か。畜生……。

行儀がいいとは言えないけど、床に座ることにした。

いや、おかしいのは分かってるけど。ずっと立っていると疲れるし

……。

「それで……今日ね、一度戦場に出てもらいたいだよ。随分苦戦しててねー。救世主様にばぱつと片付けてもらいたいわけよ」

「……戦うのか……」

「大丈夫よ。あなた達なら軽く一軍ぐらいは吹っ飛ばせるわ」

……あつちの世界から来た人間って相当強いんだな。

一軍って、もはや最強じゃないか？

「まあ、安心なさい。貴方達に言ってもらうところは、向こうも少数だから」

「そうなのか……」

「大丈夫ですよ、セオ様。私がついてます!」

……セフィーナは強いのか？

その割には、この前魔物に囲まれてたけど……。

そして俺達が来たのは、荒れた大地が広がる荒野だった。

どういうわけか、空も暗く不気味な雰囲気を出している……。

枯れ果てた木々が目に入る。

その中央に、武装した兵士達の集まりのようなものが見える。

剣や槍を持ち、鎧なんかを身に纏った明らかに戦いに来ているといった容貌……。

木陰からそれを覗きつつ、セフィーナに尋ねる。

「あいつらか？」

「はい、そうです。まだ気づかれてないようですし、不意打ちで楽にやっちゃいましょう」

「楽につてなあ……」

「その方がいいんです」

「確かに勝率は格段に上がりますね」

ラゼルも頷く。

卑怯も何も戦争には関係ないか。

まあ、そつだよな。

やらなきゃ、やられる……。

手に炎豪刀を持ち、今だこちらに気づいてない兵士達の群れに強襲をかけた。

背後から斬りかかり、一人倒す。

横からくる兵士の斬撃をかわし、また斬る……。

その戦いは、魔法を使う必要もないほどあっさりと終わってしまった。

……確かに、強いんだな……。

「終わりましたね」

全て倒し終えて、武器を消し去る。

「怪我人がいるようですから、手分けして探しましょう」

ラゼルの言葉に頷く。

今回来たのは、戦うことよりも味方の兵士達を救出するのが目的だった。

どこかに転がってるだろうし、怪我をしてるなら早く見つけて治療した方がいい。

「じゃあ……俺は、あっちを探すよ」

「セオ様、気をつけてくださいね。まだ敵が残っている可能性もありますし」

「あ、ああ……」

それにしても、あっさりすぎるな。

いくら強くても、こつも簡単に終わるもんなのか？

何か 何かある気がする。

そんな考えが浮かんでくるけど、それを振り払って足を進めた。

枯れ木ばかりの森のなかまで来たけど、兵士は見つからずため息をついた。

ホント、どこにいるんだろつな。

早く見つけられないとなのに……。

じめじめした空気が漂っていて気分が悪い。

俺、こつという空気ダメなんだよな……。

ふと、背後から足音が聞こえた。

振り向くとそこには、兵士一人ともう一人 悪趣味なピエロの

仮面をつけた魔道師らしき人物。

「貴様、よくも仲間を……」

兵士の方がこちらを睨みつけて剣を構えるが、仮面の奴はそれを制止する。

あれで前見えてるのか？

ソイツは仮面を外す。つけてる意味あったのか？ 魔力の制御とかそんなのか？

雪のように白銀の髪……片目を白い包帯で覆った……歳は十代後

半程度に見える青年だった。

「ダメだよ、君は帰った方がいいよ」

「しかし……」

「強い者には強い者でしか対抗できない」

「はっ……」

兵士は敬礼すると姿を消した。

……兵士が姿を消して二人なった途端、ぞくりと寒気がした。

他の奴とは違う。

これは恐怖だ。

コイツの戦う姿を見たこともないはずなのに……強いと分かっ
てしまう。

俺は、この世界では結構強い……でも、何か逃げないとまずい、
という気持ちがかみ上げてくる。

「じゃあ、始めようか？ 異界の騎士さん？」

俺は、ウィンドウから炎豪刀を呼び出した。

相手の武器は刀身が真っ白な剣。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7098x/>

転生したら最強で女の子で性別不問ハーレムが！！

2011年10月21日09時59分発行